

シンポジウム モビリティとコミュニティの未来を考える 第1回 都市文化施設の革新ーポンピドゥー・センターの軌跡



岡部憲明

建築家

岡部憲明アーキテクチャーネットワーク代表

今回は「モビリティとコミュニティの未来を考える」ということで、モビリティに関しては皆さんもご存じのように MaaS のような考え方が出て、ただ MaaS 自体もまだ確定していない、いろいろと探していかなきゃいけない現代社会の大きな要素です。私ができることは何かということをお西村先生やコムテックの須原さんと話をしながら考えてきた中で、自分の経験を通してモビリティ、コミュニティに結び付くようなお話ができて、経験が役に立てばなというところでスタートしました。そして4回の講義の内容を決めたわけです。

第1回目は、ポンピドゥー・センターについてお話しをします。ポンピドゥー・センターはご存じの方も多いとは思いますが、実は知られていない部分も非常に多いだろうということで、今回、私ももう一回勉強し直しました。私自身は1974年から1977年のポンピドゥーの開館までチームで仕事をしまして、引き続き、1978年までポンピドゥー・センターに付属する IRCAM という音響音楽研究所を終わらせるまでやってきました。その後、イタリアに行って、さらに3年ほどたってもう一回パリに戻ってポンピドゥー・センターを面倒見るといいますか、拡張工事や改修工事というのを務めてきて、非常に長い付き合いがあった建物です。同時に、素晴らしい方たちとお目にかかる機会があって、そうしたことでも大変に自分の中では糧になったかなと考えますが、非常に特殊なオーガニゼーションです。

「革新」ということですが、美術の世界でもポンピドゥー・センターの中の美術館も新たな美術行政、一つのあり方を作り出した重要な組織であるというふうに考えられています。その内容を少し掘り下げてご説明させていただきますので、少し歴史的な話も入れながら、私自身の専門でない部分も入りますけれどもそうしたことを加えながら、実際にパリの真ん中にこの建物を造るってどんなことだったんだという、昔を振り返りながら、当時一緒に仕事をした方も今日はいらしていますので、思い出しながら話していきたいと思います。



パリの街並み、ポンピドゥー・センター（左）とノートルダム寺院（右）

© Noriaki OKABE 提供：NOAN

1. ポンピドゥー・センターの背景

最初にポンピドゥー・センターの背景とといいますか、いつどうやって始まったのかということは明らかなポイントはあるんですけども、第二次大戦が終了した後、その中でどうやって次をつくっていくかという時代が 1950 年代ぐらいから始まるわけです。その中で一つ、文化政策に関しては、今写真が出ています右側の人物が小説家で『人間の条件』を書いたアンドレ・マルロー、当時の文化相です。その隣はご存じの方も多いとは思いますが、ル・コルビュジエ、スイス生まれのフランス人である大建築家です。彼らが新たな美術館、20 世紀の新たな美術館を造ろうという構想を持っていて、その構想が大きな出発点になっていたわけです。ただ、ル・コルビュジエは 1965 年に地中海の自分の別荘、といっても小さな小屋なんですけども、地中海の小屋で夏を過ごして泳いで、彼は「私はここが大好きだ、ここで死ぬだろう」と言ったそのとおりに 1965 年、水浴した後に海岸で倒れて亡くなります。その計画というのはそこで途絶えるわけです。

2. ポンピドゥー・センター設立のプロセス

ー構想から国際設計競技

その次にポンピドゥー・センター設立のプロセスの中で構想からコンペまでのお話をします。実は 1968 年というのは、皆さんもご記憶の方も多いと思いますが、五月革命といって学生の争乱から始まってフランス全土、特にパリは争乱状態になります。その時期、さまざまな難しい状況が発生するわけです。そしてド・ゴール大統領がお辞めになって、次にジョルジュ・ポンピドゥーが大統領になります。

1969 年に大統領になった時、ポンピドゥー大統領のなしたことというのは非常に重要です。非常に決断力のあった人だと思うんですけども、ド・ゴールから引き継いでフランスを統治するという立場になりました。1968 年というのは非常に混乱した時期、それをどういう形で引っ張っていくかという大きな使命を持っていたと思うんですが、ここで彼は美術館を造ろうと。その美術館自体は今までになかった画期的な物にしたい。しかし、全て戦場になったヨーロッパにして、文化芸術の中心はアメリカ、特にニューヨークに移ってしまったと。それに匹敵できる物を造りたいという、そういう非常に強い意志をお持ちだったと思います。

彼が考えたことは、もう一つ、その決断の中に非常に重要なことは、どこに造るんだということです。どこに造るんだといったときに、実は先ほどのアンドレ・マルローとル・コルビュジエたちはナンテールといってパリの西側のほうにある場所に造ろうと。あるい

はパリの中心部、シャンゼリゼに近かったグラン・パレという大きな建物があります。1900年の万博で造った時のものです。ル・コルビュジエはそれを壊してしまっただけで造ろうじゃないかということまで考えたようです。ポンピドゥー大統領はパリの中心に造るんだと決意します。ポンピドゥー・センターが実際に出来た場所は、パリのまさに中心ですね。その位置に建てられたということは非常に重要なことです。他にどこでもない特色ある歴史都市パリの中心部に造るということです。

パリをご存じの方は多いと思いますが、これが今のパリです。220万人前後という、あまり人口が変化しない小パリといわれているゾーンです。日本と比べるためにこれは東京の中央8区を入れた面積がほぼ同じくらいの大きさになります。パリは、次回の講義でやりますけれども、大都市でありながらコンパクトシティで非常に人口密度が高い。ほとんどの建物が8層から10層ですけれども、一番下の階を除けばほとんど住居です。日本の場合だったらこの中で千代田区、中央区、千代田区辺りは特に夜間人口がバツと減ってしまいます。パリはそれがないですね。だから人口がそこに集中している。あらゆる所がほとんどアパートになっていますから、そういう人口密度、都市人口密度としては世界で一番密度が高いとさえ言われています。

これで一応確かめていただくと、なぜ中心なのか。これは現在の航空写真で見たとところです。航空写真で見るとポンピドゥー・センターの位置はどういう所にあるかということ、パリ発祥の地といわれるシテ島の近くです。シテ島にはノートルダム寺院があり、そこから北に真っ直ぐ上がったところにポンピドゥー・センターがあります。近くにはルーヴル美術館があります。そうしたパリの中心に置くことによって、最も重要なモニュメントの位置を占めることができます。同時に、誰もが非常にたやすくアクセスできます。

この敷地の選択はポンピドゥー大統領の決断です。実は1967年ぐらいからこの敷地の中心部分に図書館を造ろうという計画がありました。その計画に、ポンピドゥー大統領は美術館と図書館を合わせるという計画に持っていきます。これはヨーロッパの美術館をやる人たちの思想の中にもあったものですが、ポンピドゥー大統領としては計画されていた図書館と美術館を重ね合わせて、誰もがやって来られるような場所を造る。図書館に来る方は勉強をしに来ます。フランス人はあまり本を買わないですから図書館で勉強をする。そのため図書館が充実しています。充実していて必ず来るので、そういう人たちが現代アートにふれる。そういう機会を設けることでオートマチックに自然に身に着けるようなことができるだろうと考えた。

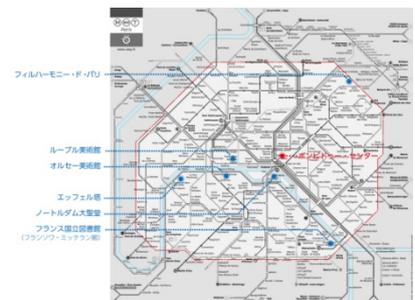
今までのルーヴル美術館のように昔からある美術館はエリートのものであって、一般の人たちはちょっと足が遠く重さがあったものをぶち壊すという、これは1968年の学生改革、五月革命なんかの影響も非常に受けた思想を取り入れていくわけです。これは非常に大きな英断がそこにあって、まず敷地を選ぶ、それから美術館と



パリと東京8区の比較
提供：NOAN



パリ中心部の航空写真
提供：RBPW



パリとポンピドゥー・センター
提供：NOAN

図書館を合体して造る。オルセー美術館はポンピドゥー・センターより後にできます。その後に大きな国立図書館が次にできていくわけです。

ポンピドゥー大統領がもう一つ提案したこと、それは国際コンペをやることです。現代の国際コンペの大きく著名なのはシドニー・オペラハウスです。1960年代です。その後はあまりないんですね。パリの中心のこの施設が国際コンペとなりました。その時に大統領の規定で、やはり制限をあまり作るなというようなことを言われています。制限を作らないで重要なプログラムをすること。何が必要とするかというのを非常にラディカルなプログラムを作っていく。コンペは日本でも実施された後に色々問題になっているものもあると思いますけれども、ポンピドゥー・センターのコンペは非常に成功したといわれるのは、まずプログラム。ポンピドゥー大統領の思想にしっかりとしたものがある。そして国家としてそれを後押しをするだけのファイナンシャルなサポートもする。

そしてもう一つの大事なことは、審査員です。審査員はフランス人主体でなく、外国人が多い形に組まれます。審査委員長を務めたのが、ジャン・プルーヴェ。ル・コルビュジエの友人でもあって、非常に優れた建築家でありエンジニアだったジャン・プルーヴェです。さらに審査員としてアメリカの建築界の黒幕とも大物ともいわれるフィリップ・ジョンソンがいました。他には美術館の新たな構想を持っていたウィレム・サンドバークというオランダの方です。それからブラジルの建築家オスカー・ニーマイヤーもいました。非常に優れた審査員が集まっていました。

このコンペは世界から 681 案、オープンでコンペ案が送られてきました。その中の 400 点以上が外国からの参加です。選考が続き、最後の 5~6 案の中から最後に選ばれたのが、レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャースとジャンニ・フランキーニという 3 人のチームの案です。ピアノとフランキーニがイタリア人で、ロジャースはイギリス人ですけれども、もともとファミリーはイタリア人です。模型の提出も求められていました。500 分の 1 ぐらいの模型です。非常に可愛い模型ですね。このチームにオーヴ・アラップ・アンド・パートナーズというエンジニアリングオフィスが付きました。アラップ社はシドニー・オペラハウスを成し遂げたエンジニアグループです。

アラップ社のサポートは非常に重要で、このコンペ案でもすでにアラップ社はエンジニアリングの案を持っていて、それとピアノ&ロジャース、フランキーニの建築的な発想が結び付いたものです。非常に重要なことはプログラムにありまして、コンペで提示された一つの要求事項は、非常にフレキシブルな建物を造ることでした。将来どうしても変えられるようなあらゆる活動パターンに耐えられるような建物を造ってくれと。それからもう一つは、都市に対して開かれた建築にしてくれということです。

今までになかったものを造れというそういう命題があって、ポンピドゥー大統領がいろんな規制を外せと言った時に何が外されたか



1971年、コンペティション審査会の様子
提供：RBPBW



コンペティション時の模型
提供：RBPBW

というのは一番重要なことなんですけれども、高さ制限をなくしたのです。パリは大体 30 メートルぐらいの高さの制限が基本です。だからポンピドゥー・センターは周囲の建物から倍も飛び出しています。多分想像することによって、ポンピドゥー大統領は建物の高さ制限をなくすことによって自由度が与えられる、同時に一つのモニュメントになる高さを獲得できるだろうと。最初に見せたノートルダムとの写真をご覧になって分かるように両方がパリの街から突出して見えます。現在のパリの中心の姿ですね。

あと、大事なのが広場です。この広場を建物と同じぐらいの広さでもって建物と向かい合うように設け、パリの街とつながるオープンなスペースとしています。イタリアの広場というのは人間のための広場です。ルドフスキーという文明評論家がイタリアの広場は人間の広場、イタリアの道は人間のための街路だということを言っていました。アメリカの道は車のためという、ひどくアメリカ嫌いの方だったですけれども、彼が言っているようにイタリアの広場は素晴らしい。実はパリの広場というのは多くがモニュメントを見るための広場、そこで儀式を行うための広場が多くて、人が集う場所、イタリアの広場みたいなものはなかったと言えます。ポンピドゥー・センターの広場はそうした役割を果たすように要求されていました。

このコンペ案のプログラムにはそういう意図があったにもかかわらず、681 案あった中でそれを唯一守ったのがピアノ&ロジャース、フランキーニの案だったということです。そういう報告を受けています。コンペに勝った時、ピアノたちは 30 代でした。みんな若造というか 30 代ですから非常に若いチーム。ただフランス側としては、アラップが背景にいて重要なサポートが付いているということは一つの保証にはなっていたわけです。

3. ポンピドゥー・センター建設のプロセス

建設のプロセスの話に入ります。ピアノ&ロジャースのチームは常時 30 人ぐらいでした。出たり入ったりが非常に多かったのも、ほんの数週間しかなくて辞めてしまった人もいますし、そういう意味では 200 人、300 人という人が出たり入ったりしたと思います。

フランス人はあまりいませんでした。建物自体が非常にテクノロジーの固まりみたいな建物であったことと、やはり建物に対する批判が非常に強く、パリの中でも反対の人もすごく多かったというようなことも含めてだと思のですが、ほとんど混成、外人部隊です。一度、国籍を調べたことがあって、その時に 16 カ国の国籍。現在の世界の建築界ではそういうことは当たり前ですが、1970 年代のことです。ヨーロッパの共同体もそんなに機能していたわけではない時代です。そこで完璧なる外人部隊でもってこのチームは構成されていたわけです。



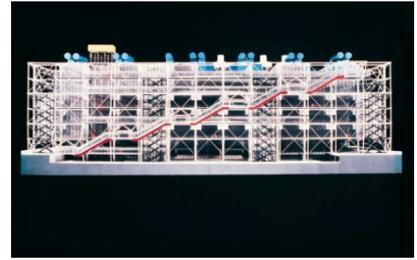
ピアノ&ロジャースのメンバー
提供：RBPW

これは最終案の模型です。最初の先ほどの可愛らしい模型と、この最終的に出来上がったものは構成が変わりません。広場側は人間のための施設、反対側はサービス、テクノロジーの施設、その間は柱のない自由な空間。各フロアごとに 160 メートル×50 メートルの非常に大きな面積が全く柱のない空間で造り上げています。だからどんな機能を置いても使えるようになっているわけです。

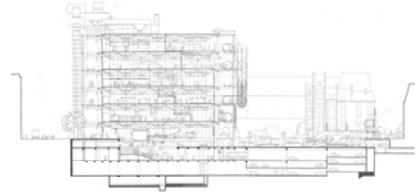
建物を断面図で見ますと、50 メートルの幅があって、外側に通路、そしてぶら下がっているエスカレーター。反対側はサービス装置で、空調機や電気関係の物が上がってくるほうです。これは出来た当時の空間構成ですけれども、今でもそれほど変わってはいません。

ポンピドゥー・センターが出来た当時は 4 つの大きな組織からなっていました。1 つは MNAM、パリの国立近代美術館。もう 1 つが BPI、公共情報図書館。誰もが来て自由に本が読める非常に教育的な巨大な図書館です。そして CCI で産業創造センターです。後に MNAM と合併して吸収されます。最後に隣接する敷地に造られた IRCAM 音響音楽研究所。ピエール・ブーレーズがアメリカからフランスに引き戻されて、IRCAM 音響音楽研究所の所長となります。その他に映画館や、非常に世界中でも人気が出た「子供のアトリエ」という子どもたちのための組織があります。あとはテンポラリーのギャラリーやレストランがあります。

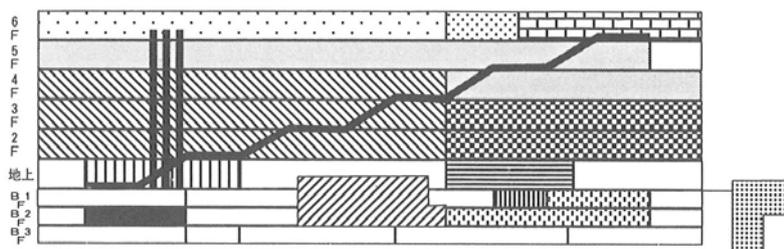
MNAM、BPI、CCI、IRCAM という 4 つの大きな組織にさまざまな他の組織が付いて出来上がっています。全体で 10 万平方メートルあります。そのうちの 5 万平方メートルが主たる活動空間として、残りは地下に設けられた駐車場やアトリエ（工房）で構成されています。現在、地下にあった行政部分は上層の美術館や図書館に振り分けるという構成に変わっています。



最終案の模型
提供：RBPW



断面図
提供：RBPW



特別展覧会場	映画館	レストラン
MNAM (パリ国立近代美術館)	BPI (公共情報図書館)	オフィス
企画展覧会場 (CCI ギャラリー)	現代ギャラリー	フォーラム
工房	子供のアトリエ	ホール
IRCAM		

開館当時の断面構成図

出典：『ポンピドゥー・センター物語』岡部あおみ 著，紀伊國屋書店，1997 年

ポンピドゥー大統領が選んだ敷地は、ポンピドゥー・センターという名前に固定するまでの間はずっと長いこと、ボブール、プラトー・ボブール、ボブールの丘といわれていた場所で元々駐車場として利用されていました。あまり環境のいい場所ではなくて非衛生的な地区といわれていた所です。敷地の西側のセバストポール通りの向こう側にパリの市場レ・アールがありました。

日本の公共工事の場合、設計者が図面を描いてそれを発注者の行政機構が入札にかけます。そうすると鹿島、竹中、大林といったいろいろなゼネコンがこのぐらいの工事だと入札し、落札したゼネコンに一括発注されます。ただフランスの場合は日本と発注方式が全く異なり、日本的なゼネコンという組織がありませんので、設計者が責任を持って一つ一つ条件を作って入札にかける。分離分割発注の徹底したものです。だから設計者の責任がものすごく大きく、仕事量も膨大です。私はインフラストラクチャー、地下工事の最中にピアノ&ロジャースに入所し、鉄骨図面から設備、インテリア関係の図面を描いて、徐々に発注していきました。コンペ案が決まった後に予算が決まって、予算が調整されて全体予算が決まったわけですが、そこからの一つの制限は、予備費というのがあります。それは10%オーバーまでは認めるけれどもそれ以上は駄目というものです。設計者は予備費を含めて全体予算を守らないといけません。あと工期を守らないといけない。1971年から始めて76年までに終わらせなさいと。これは非常に厳密な制限でした。

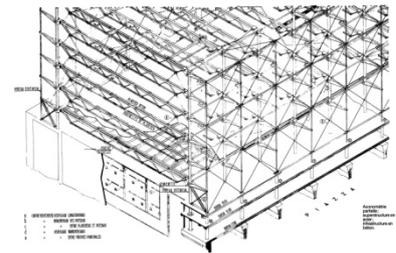
これはポンピドゥー・センターの構造です。短手方向に50メートルの梁が渡っていますが、その構成が長手方向に166メートル連なります。内部は全て無柱空間です。柱は外側にしかありません。柱は圧縮材と引張材の2本で出来ていて、それをつなぐガーブレットという鋳物で作った部材でバランスを取り梁せいを縮めています。全ての複雑度をファサード部分に集約するという構造方式が採られました。この形によって、全く柱のない内部空間をつくり上げて、建物のフレキシビリティを実現しています。

実はこのシステムは、19世紀にドイツのガーバーというエンジニアが考えた橋梁システムです。ただ橋梁だから1層であったものなのですが、ポンピドゥー・センターはこれを重ねていったんです。これが大変で、その重ねることによってできるさまざまなコンストラクション・トランス、施工方法に考えられないようないろいろな難しさが実際に工事を携わってきた私たち建築家の課題としてあったわけです。ただ、このシステムがいかにフレキシブルであるかということは、今後40年間にわたってこの建物が生き続けた理由の一つでもあります。

鉄骨工事を入札にかけてみたら、何と入札の金額は非常に高く入ってきたんです。いわゆる談合があったんじゃないかとかいろんな話があって、ポンピドゥー大統領の許可でフランス国内ではなくてもっとオープンにしましょうと。実はこれは内々の話ですけども、この鉄骨の見積もりをピアノ&ロジャースとアラップは日本の新日鉄に依頼して出してもらったら、想定していた価格で輸送費を



1969年、ボブール地区の航空写真
提供：RBPW



構造アイソメトリック
提供：RBPW



構造模型
提供：RBPW



トラス梁の搬送
提供：RBPW

入れても収まるということが分かったんです。ただ日本にはまだ出せないなということで、ヨーロッパ内でマーケットをオープンにします。そしてドイツのクルップ社が価格内で応札しました。そして、フランスが初めて巨大なプロジェクトを海外に発注し、クルップ社の下で鉄骨が造られました。

この梁は 50 メートルあるんですけども、実はこの梁の造り方は普通の鋼管、スチールと、一部分に鋳物を使っています。この辺りの溶接は非常に複雑でとても現場ではできません。そのため、50メートルの梁を工場で造って、これをドイツからフランスまで持ってこなきゃいけないという、次の大きな課題が出てきます。最初はいろんな案が出て、ドイツの港から出してセーヌ川を通過して、セーヌ川からセバストポール通りを通過して持ってこようという案がかなり有力にあったんですが、やはり難しい条件が幾つか出てくる。最終的にはドイツから鉄道輸送で、パリ北側のラ・シャペルという貨物駅があるんですが、そこに持ってきて、そこから真夜中に大きなトレーラーでパリの真ん中の現場まで持ってきました。すごく難しい搬入の仕方をしています。多分、記憶では1週間に3本、この50メートルの梁を運び込んでいます。交通制限をして運ぶ。50メートルですからすごい大きさです。

この当時、世界でおそらく3台しかなかったといわれる500トンを超えるクローラークレーンを持ってきています。非常に微妙なコンピューター制御のクレーンでこの梁をつり上げているんです。これを見た時はもう感動的というか、すごく衝撃的でした。

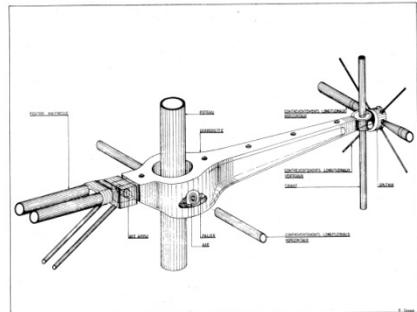
これはガーブレット。ガーバーシステムのもと、ここで釣り合いを取ります。梁せいを減らして複雑度を全部ここに集めるというものです。これは鋳物で出来ています。1本が10トン、それで長さが8メートルあります。非常に精度が高い鋳物で造ります。鋳物は19世紀に多く使われたんだけど、ひびが入ると割れてしまうので、次第に使われなくなりました。ただ、ピーター・ライスというエンジニアが鋳物を使うとゴツゴツした鉄骨ではなくて優しい構造体が造れるんだということを主張して、鋳物を使うことが決まりました。部分的には精密な機械加工を組み込みました。機械加工を入れてメカニカルに造り上げていくという方法を取りました。

柱も鋳物で造っています。これは肉厚をもたせて高強度としながら、80センチぐらいの径の非常にスレンダーに造り上げることがデザインのベースです。普通のインダストリアルで造るような建物とは全く違うデザイン要素が全ての部材の中に閉じ込められているわけです。模型をたくさん作って形を決めていきました。

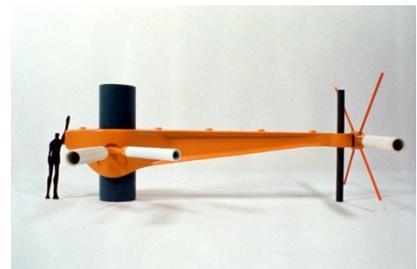
ピーター・ライスの写真です。ピーターとはずっとポンピドゥー・センターから関西空港までお付き合いをしたんですが、1992年、関西空港のメインビームが上がった頃に亡くなりました。ピーターがその鋳物を使おうということを提案しました。それとガーバーシステムを使うというのはレナード・グルットというもう一人のエンジニアの提案だったと思うんですが、そうしたものを一体化して造り上げていったわけです。



トラス梁の建方
提供：RBPW



ガーブレットとその他の構造部材との
取り付け示した図
提供：RBPW



ガーブレットの模型
提供：RBPW



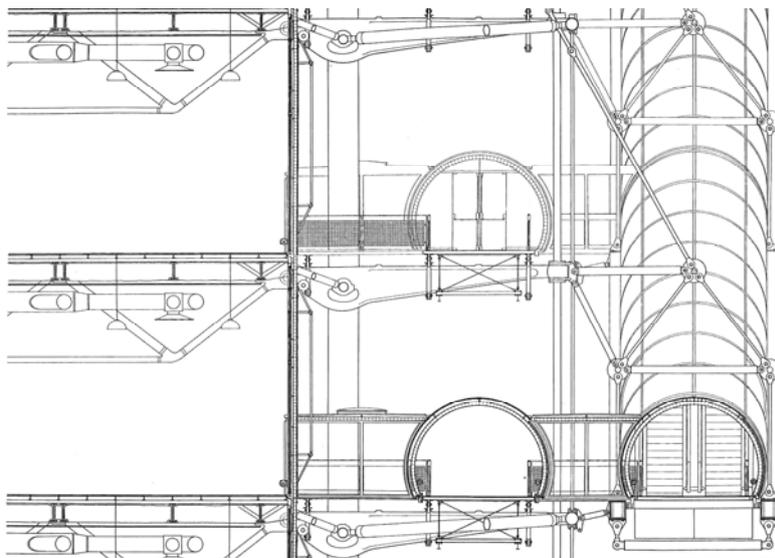
ピーター・ライス (1935-1992)
出典：『ピーター・ライス自伝 あるエンジニアの夢みたこと』ピーター・ライス 著、岡部憲明 監訳、太田佳代子+瀧口範子 訳、鹿島出版会、1997年

ガーブレットの部分はフランス内の工場でクルップから下請けした鋳物工場で作った物です。19世紀に駄目になった鋳物を再び使えるようにしたのは、小さなひびを見付けることができる検査技術の進歩によっています。検査結果によりガーブレットは3個ぐらい捨てているし、メインビームも1本捨てているんです。ひびさえなければ絶対安全だということが証明される、現代の技術でもってポンピドゥー・センターは成立したということですね。

地下工事はものすごく時間がかかりますが、地上の鉄骨が上がりだすとあっという間です。全部の上層構造が組み上がるのは1年間でした。これは大きな梁の建て方の風景ですが、最初はなかなか入らなくて何が起きたかという、ドイツから来た非常にタフなヘラクレスみたいなおじさんが来て木槌でもってボーンとたたいたら70トンの梁の頭がポッと入り込んで収まりました。当時の首相シラク氏は非常に重要な役割を果たして、ポンピドゥー大統領が亡くなった後、ポンピドゥー・センターを建設できるようにすることに尽力を果たしてくれました。次の大統領は割と積極的でなかったのでシラク氏がものすごく頑張ってこれを完遂できることを守ってくれました。ポンピドゥー・センターの初代総長はロベール・ボルダースです。彼はこの建物の守護神みたいな方でした。彼らが若い建築家たちを守ってくれたのです。

構造体が建ち上がって、今度はペインティングです。メインの構造体は全部白。次にテクニカル、サービスの物がどんどん積み重ねていかれて、広場と反対側ファサードは、もう散々、石油工場だと揶揄されました。

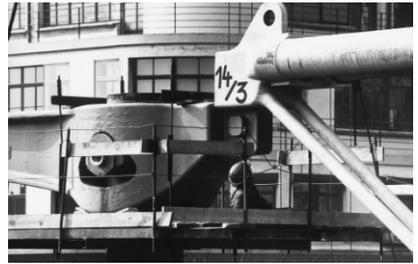
これは屋上の設備機器の模型です。たくさんの機器モデルを作りました。これは多分、石田俊二さんが作ったもので、大変多くの模型を作っていました。今だったら3Dプリンターとかを使うんですけども、手で作っていくと自分たちのアイデアを創造、検証できます。手作りの模型は非常に重要な意味を持っています。



広場側ファサード 断面図
提供：RPBW



ガーブレットの製造
提供：RPBW



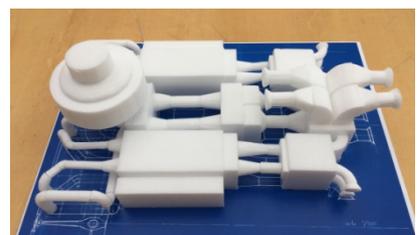
建方. ガーブレットに梁を挿入する様子
提供：RPBW



建設中のポンピドゥー・センター
提供：RPBW



塗装された広場側ファサードの構造体
提供：RPBW



塗装された広場側ファサードの構造体
提供：RPBW

パリの風景の中にポンピドゥー・センターが姿を現してきます。この断面図はちょうど広場側の主要部分を描いたものです。ここが通路、ここがエスカレーター。このガーブレット、この建物はこのシステムの先に重たい物をたくさん付けられるようにできている。200 トンぐらいの物を付けられるように造ってあります。このエスカレーターをぶら下げることでもできるんです。初期の計画では巨大なスクリーンを付けるということもありました。今でもガーブレットの先端には物を付けることができるんです。フレキシビリティ、将来的にもいろいろな使われ方があるということです。

先ほどのガーバーシステムの特徴は、梁の背を 2.5 メートルぐらいに抑えられることです。各階の天井高さが 6 メートルぐらいありますけれども、それに対して梁を低くするように工夫されています。

エスカレーターをつり下げている風景です。この写真をお見せするのは、2019 年からポンピドゥー・センターは大改造に入っていて、エスカレーターは 40 年以上たちましたので全部新しく取り替える工事が始まっています。

エスカレーターの前で 2 人が話している写真ですが、左はスーパーストラクチャーのチーフをやっていたローリー・アボット。非常に長身で車気違いです。たくさんの自動車を持っていました。暇ができるのと車に乗ってレースに行くというふうな人でしたけれども、ドローイングの能力、スケッチがすごく素晴らしくて、3 次元のスケッチを頭の中で全部組み立てて描いてしまう能力があった人です。もう一人はイギリス人のエリック・ホルトで、ファサードのチームを率いていました。スイス的なセンスで精密なファサードのドローイングを描いていました。大阪万博の美しいスイス館のデザインを手掛けた建築家です。何となく 2 人でもめている雰囲気の写真です。

出来上がったポンピドゥー・センターの写真です。現在この風景があります。

ポンピドゥー・センターにはもう一つ建物があります。それはセンターのすぐ横にある IRCAM 音響音楽研究所です。これがピエール・ブーレーズ、世界的な音楽家であり近年亡くなられたんですが、アメリカで活躍していたブーレーズをどうしてもポンピドゥー大統領はフランスに戻したいと考えました。ブーレーズはその時の条件の 1 つに音響音楽を研究する施設をつくりたいということを出しました。そこで、音響音楽研究所をブーレーズのために造ります。ブーレーズ自身が非常に政治力も力もあった人で、資金も集めてくる。パワーがあった方です。同時に、音楽と生涯結婚したような方でしたから、音楽のことしか考えていなかった人生のように見えました。大きな影響力を世界の音楽界に与えた方です。

われわれは IRCAM-1 と呼んでいますけれども、これは建物全てを地下に埋めて造った研究施設です。1974 年にポンピドゥー大統領が亡くなるのですが、その時にプロジェクトがつぶれてしまうかも



西側外観
© Shunji ISHIDA 提供：RBPW



エスカレーターの設置工事
© Shunji ISHIDA 提供：RBPW



ローリー・アボットとエリック・ホルト
© Shunji ISHIDA 提供：RBPW

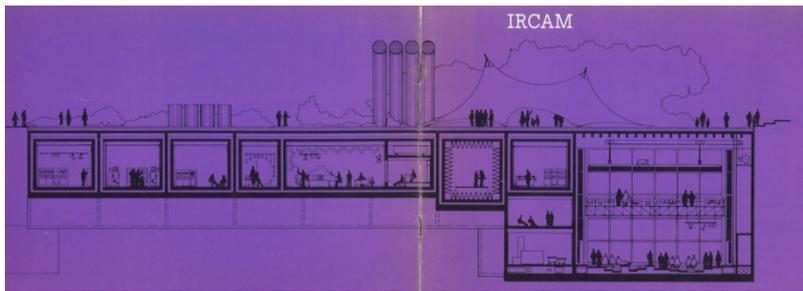


広場側ファサード
© Shunji ISHIDA 提供：RBPW

しれないという状況になりました。あまり表に出ていない話なのですが、その当時の首相シラク氏がこのプロジェクトを守るということに徹底して次の大統領を説得して建物が出来るようにしてくれました。その時、工事は計画通りに進んでいて地下を掘り終わったところだったんです。IRCAM 音響音楽研究所の予算を削れという話になって半分に削られ、地下の一部は埋め戻されました。半分に減った IRCAM 音響音楽研究所は、後に増築棟の IRCAM-2 が地上にでき、現在の姿になっています。

IRCAM-1 の時のプレゼンテーションは 1974 年です。写真奥からブーレーズ、さっき守護神と呼んだボルダーズ総長、リチャード・ロジャース、レンゾ・ピアノです。

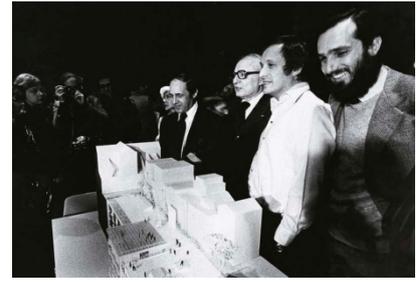
これは IRCAM-1 が出来た頃の断面図ですが、建物は全部地下です。全て地下に入れて二重構造の床ですね。10センチ厚、1メートル幅のコンクリートパネルでできた床版が全部ゴムで浮き上がって外のインパクトノイズが室内に入らないように造っています。その上の建物自体も二重構造。そうやって大きなゴムの塊の上に全てのスタジオを置いています。



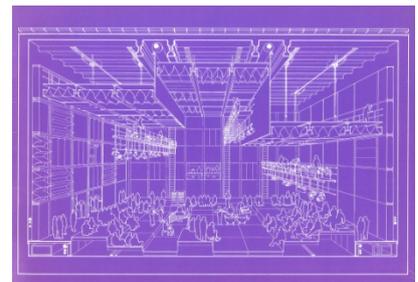
IRCAM-1 断面図
出典：『Centre Pompidou IRCAM』

もう一つ、この中にグロンド・サル「エスパス・ドゥ・プロジェクション」という 400 人が入るくらいのホールの大きさですが、コンサート以外に音響の実験から建物を造る時の音響設計もできるような施設です。演劇もできれば音楽もでき、いろんなことができるけれども、最大の特徴はペリアクトと呼んでいるパネルで構成した回転体が角度を変えることでポジションで音響の残響時間を変えることができます。残響時間を 0.5~4.8 秒ぐらいまで変えられます。だからお風呂、あるいはカテドラルの中で歌を歌うと上手に聞こえるような残響が非常にある環境や、反対に野原に出て大きな声を出しても全然音が返ってこないような環境を演出できる空間です。

同時に、この建物は空間のボリュームも変えることができます。あらゆることを実験できる場を造る。これはブーレーズが望んだものです。それをオランダのポイツという音響音楽研究所と一緒に造ったのです。ピアノを弾いているのは私ですけれども、私はピアノを弾きません。ジャンニ・ベレンゴというイタリア人のカメラマンに「ノリ、そこへ座れ、ピアノを弾いている格好をしろ」と言われて撮った記念写真です。



1974 年、IRCAM プロジェクトの記者発表の様子
提供：RBPW



「エスパス・ドゥ・プロジェクション」
断面パース
出典：『Centre Pompidou IRCAM』



「エスパス・ドゥ・プロジェクション」
© G. B. Gardin 提供：RBPW

今の IRCAM は施設も活動も日々進んでいますから、グランド・サル「エスパス・ドゥ・プロジェクション」でできるようなことは本当に小さなスタジオでも音響を再現できるように電子的操作が進んでいます。IRCAM はコンピューターを徹底的に使う、コンピューターの開発も今は 6 世代目ぐらいになる。キャトル・イックスというコンピューターを使って、その開発も続けています。

1977 年の 1 月 31 日、工期を守ってオープニングを迎えました。その時のポンピドゥー・センターはご覧のようにパリの屋根の上から極端に飛び出していて、パリの街角で唯一色が付いている建物でした。以後、こうした冒険と挑戦は許されていません。1 回限りの建物です。

ご覧のようにここに広場があって、この広場は都市とつながっています。これを少し行くと、この先にレ・アールというパリの地下鉄や郊外鉄道の乗り入れる駅があります。まさにその近くにあるということで、今回のテーマである「コミュニティとモビリティ」ですけれども、モビリティに対してそのノード（結節点）に当たるターミナルのような文化施設になっています。

ポンピドゥー・センターは、夜の 10 時まで開いています。映画館は真夜中の 12 時まで開いています。夜 5 時で閉まる美術館では、税金を払って働いている多くの人たちが行くことができない。それをひっくり返したのがポンピドゥー・センターです。もともとスウェーデンの美術館の館長をやっていたポントゥス・フルテンがそういう考えを持っていたんですけれども、ポンピドゥー・センターでは大々的にオープンにする。図書館だって夜 10 時までやっている。そうした場合、警備上の問題とかアドミニストレーションがいろんなことを言います。それを一挙にひっくり返したんですね。ポンピドゥー・センターは多くの人たちが夜 10 時まで利用しても、1 時間以内に家に帰ることができるような立地条件です。立地条件は非常に大事です。これもポンピドゥー大統領の決断が大きい要素だったと考えられます。

全体の風景です。ポンピドゥー・センターの特徴は透明性です。ルーヴル美術館も大改造しましたので今はすごくよくなっているんですが、多くの美術館は石で閉ざされた石造の建物の中に潜んでいた。そうした物を全部開けっぴろげにして全てが通過できて見る、見られるという格好です。図書館に行った人もその中から外が見えるし、更に上がると美術館になり、最上階の企画展の美術館からはパリの街並みを見渡すことができます。

ポンピドゥー・センターはパリの真ん中にありますから、ここから見るとエッフェル塔から見るよりは、パリの風景がすごくいいわけです。ある時、非常に問題になったのは、観光バスが路上駐車し交通渋滞を起こしたことです。地下に駐車場はあるんだけど入るのが面倒くさいから路上に止める。パリ警察から散々、ポンピドゥー・センターのおかげで交通渋滞すると文句を言われました。広場側のエスカレーターを上がることやデッキを通ることは無料だっ



スタジオ
© G. B. Gardin 提供：RBPBW



外観. パリの街並みから顔を出す
提供：RBPBW



外観. 広場から見る
提供：RBPBW

たんですね。ピアノ&ロジャースの建物のコンセプトから、無料にすることをベースにしていたんだけど、あまりにもそういう観光で上がる人たちが増えてしまい、それはまずいだろうということである日から上がるところが有料になりました。

これは 1991 年、コンペの勝利から 20 周年記念にスタッフがみんな集められた時です。イギリス人やフランス人、日本人のスタッフもいます。1974 年か 75 年ぐらいに日本人のスタッフも 5 人ぐらいいたことがあります。多かったのはイギリス人、それからスイス人です。イタリア人、オーストリア人、世界中から建築家が集まっていました。



1991 年、コンペティション優勝 20 周年を祝うパーティ
ピアノ+ロジャース、アラップ、ポンピドゥー・センターのメンバーが集う
提供：RBPBW

4. ポンピドゥー・センターの活動

ポンピドゥー・センターの活動について、これは私の専門の分野ではないのですが、どんなことをやっているかご説明したいと思います。



現在のポンピドゥー・センターの組織ダイヤグラム
提供：NOAN



ポンピドゥー・センターと広場
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

現在のポンピドゥー・センターのオーガニゼーション・ダイヤグラムを簡単にまとめてみたんですが、ポンピドゥー・センターは Centre national d'art et de culture Georges Pompidou、ポンピドゥー国立芸術文化センターという名前が付いています。ここにプレジデント、総長がいます。それと並行してある組織というか、独立した組織として BPI（公共情報図書館）、それから IRCAM（音響音楽研究所）があります。このジョルジュ・ポンピドゥーと直結している組織として MNAM（国立近代美術館）とそこと合併した CCI（産業創造センター）があります。この大きな 3 つの組織になっているわけです。あとはさまざまなディレクション、サービスするためのいろいろな活動があります。本もたくさん出しますし、カタログも出版する。あるいはパフォーマンス、演劇をやったりダンスをやったり、そういうものを全部仕切る組織が付随しています。

まず、一番目玉となる図書館は 1 日 1 万人以上とすごい数の人が利用します。一方、美術館はさまざまな企画展をやってきました。美術館の初代館長は非常に面白い人だったんですが、ポントゥス・フルテン、スウェーデン人です。ポンピドゥー・センターが完成する前の 1973 年から館長の役割に入って、いろいろな企画を作りました。写真はポントゥスと、その横にいるのがジェルマン・ヴィアット。彼とはもう長いお付き合いをしていますけれども、フランス人でポントゥスをサポートして、後にやはり美術館の館長になる方です。ポントゥスは世界の美術館の考え方を画期的に変えた方です。度胸もあるし、傑作な人です。レンゾ・ピアノとも非常に仲が良かったので、いろいろなプロジェクトを一緒にやりました。

夜のポンピドゥー・センターです。夜は大きな豪華客船が港に着いているようなそんな雰囲気があります。昔の美術館とは全く異なるオープンな世界をつくり上げています。1 階では広場と内部がつながって見えます。ピアノ&ロジャースが思ったメタファーというか、一つの比喩的にいえば 19 世紀から 20 世紀初頭のヨーロッパの駅。今でもヨーロッパの終着駅は同じような雰囲気で、誰もが入っていく開放的な空間です。それと同じような空間をここでも造りたいなということで、オープンに入ってこられる場所を造る。広場と一体化して、フォーラムと名付けたエントランススペースです。

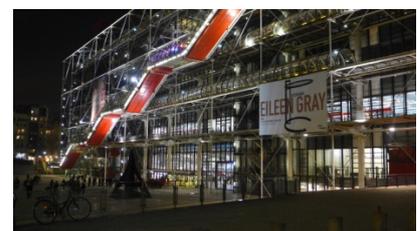
初めのコンセプトにいくつか問題がありまして、10 年ぐらいこの改造プロジェクトをやっていました。実はこのスペースには地階との間に大きな穴が空いていてそこをフォーラムと呼んでいたんです。コンペ案の時にあったものです。インスタレーションの場として活用されたりしましたが、うまく使いこなせないことが多くて、結局 2000 年の時にこれをある程度埋めて 1 階を広くしたんです。そして今うまくいっています。ここでは広場と一体化したフォーラムという、フリーに入れるエントランススペースがあります。



ポントゥス・フルテン（右）とジェルマン・ヴィアット（左）

出典：『Le Centre Pompidou, Les Annees Beaubourg』

Germain Viatte 著, Gallimard, 2007 年



夜のポンピドゥー・センター

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



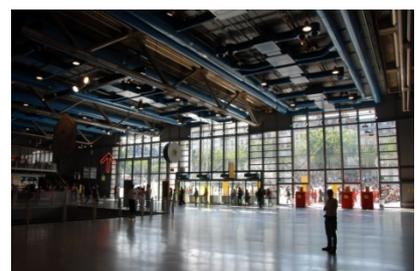
広場に並ぶ来館者

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



フォーラムから広場を見る

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



地下との吹き抜けの一部が埋められ広くなったフォーラム

© Noriaki OKABE 提供：NOAN

ポンピドゥー・センターがスタートしてから初期の展覧会。これはポントゥス・フルテンのイニシアティブで企画したのですが、画期的な展覧会を行っています。それは二都展、2つの都市を対象にして行う。2つの都市ですからインターナショナルitätがあつて、プラスそれに対してさまざまな領域、アートだけではなくて建築やデザイン、文学や映画、そうしたものも全部ひっくるめて2つの都市の間で何が起きたかということを見せようじゃないかという考えをポントゥスは持っていて、その展覧会を開きます。

第1回目はオープニングの年、1977年の「パリ-ニューヨーク」です。フランス、ヨーロッパからニューヨークに散々いろんな物を持っていかれました。そのニューヨークにオマージュを捧げてやろうということで「パリ-ニューヨーク」展が開かれます。マルセル・デュシャンを始め、多くのフランス人がニューヨークで活躍していました。フランスからニューヨークに渡った人たちが多かったわけです。その次の年に行われたのが「パリ-ベルリン」展です。これも二都展です。非常に素晴らしい展覧会でした。

その次が「パリ-モスクワ」。「パリ-モスクワ」展というのは、ポントゥスたちからもいろいろ聞いたんですが、まだ鉄のカーテンの向こう側にソビエトがあった時代です。ポントゥスは先ほどのボルダーズ等とともに、作品を借りるための交渉にソビエトへ渡ったのですが、ソビエトは目当てのロシアン・アバンギャルドの作品をなかなか出してこない。

自国の中で隠し続けていたというか、やはりソビエトの中の最もラジカルに進んでいた芸術家たちをその後で押さえ込みましたから、そういう事情もあったのだと思います。ボルダーズは非常に有能な外交官でもあったので、それをあさってあさって、交渉して交渉して引きずり出した。僕らも見て感動したんですが、さまざまなロシア構成主義の時代の素晴らしい作品、かなりほこりにまみれて汚れていましたが、さまざまな時代のロシア構成主義の作品は、どれも素晴らしく迫力がありました。ポンピドゥー・センターは鉄のカーテンがあった時代に「パリ-モスクワ」展を実現したのです。

3つの大きな二都展の後、相手にする都市がない。東京を相手にしようとしたんですが、これがなかなかできなくて後にご紹介する「前衛芸術の日本」展として実現します。最後が「パリ-パリ」。これが終わった時点でポントゥス・フルテンは館長の契約が切れてお辞めになります。この4つの展覧会が二都展。これはポンピドゥー・センターの6階の全部を使って行われました。

インターネットでポンピドゥー・センターのアーカイブにアクセスすると40年間のさまざまな展覧会を見ることができ、小さな展示スペースもありますので、同時期に20個ぐらいの展覧会をやっているんですね。そういう中で特徴的な展覧会の1つに、CCI、産業創造センターが美術館と一体化する前に開催したものがあります。それは1980年にやった地図をベースにした展覧会です。人間はどんなふうに地球を見てきたんだろうかという展覧会で、すごく



「パリ-ニューヨーク」展 (1977)

© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI, Centre Pompidou



「パリ-ベルリン」展 (1978)

© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI, Centre Pompidou



「パリ-モスクワ」展 (1979)

© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI, Centre Pompidou



「パリ-パリ」展 (1981)

© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI, Centre Pompidou

衝撃的な展覧会です。「2つのグローブ」というイタリア人が造った物だと思いますが、この巨大な地球儀。これは直径4メートルぐらいあるんです。すごい物を造ったものだなと思いますけれども、それを持ってきました。この時、さすがにポンピドゥー・センターの広場側のガラス窓もこれを通すだけの幅がなくて、ファサードのガラスを何枚か外してフォーラムに入れたものです。

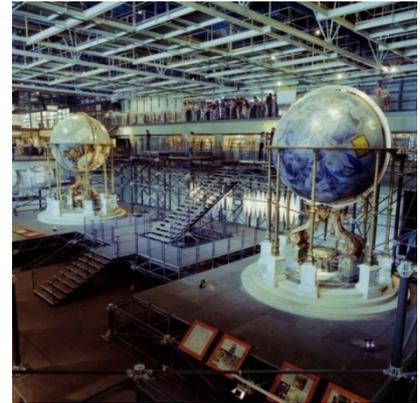
この展覧会をオーガナイズしたのは、私も長い間お付き合いをしたのですが、イタリアのラジオテレビ局RAIのディレクターだったジュリオ・マッキです。彼はユニークな発想を持っていた方でした。彼とオーストリア人でピアノ&ロジャースのスタッフだったライナー・ヴェルビッツが構成してつくった展覧会です。実は私の友人で法政大学の教授だった森田喬くんは、留学生としてフランスに行き、他のスタディをしていたんだけど、この展覧会を見た途端に地図にのめり込んで地図の世界に入っていきます。今は日本地図学会の会長をやっています。それほど魅力があった展覧会です。

次に、記録的に人が入った展覧会が2つありまして、1つは「ウィーン」展、もう1つはダリの展覧会です。「ウィーン」展が1986年に開催されるわけですが、すごい人数が入りますので、最後の週には10時に閉めるところをだんだん延ばして、最後は夜中の2時まで美術館を開けるということをやっています。誰もに見てもらおうとすることがやはり大切なことだということは一つの現象ですが、この時はちょっとやり過ぎなぐらいまでよく開けました。

あと、日本ではあまり知られなくて残念なんですけれども、「前衛芸術の日本」展は日本をテーマとした展覧会としては世界の中でも最大の規模で、一番早い時期に行ったものです。1986年の12月から1987年の3月まで、ポンピドゥー・センターの6階全部を使って行った大きな展覧会です。

これは先ほど紹介したジェルマン・ヴィアット、それに高階秀爾先生が全体のコミッショナーをやられています。私の妻の岡部あおみはアート関係の、今日おいでになっている三宅理一さんは建築関係のコミッショナーで入っていました。準備には4年間ぐらいかかって、私は全体の会場設計をやっていたのでこれは2年間ぐらいかけてやったものです。展示の期間は3カ月程でした。この時は1日2,000人ぐらいの方に観ていただきました。なぜか日本ではあまり知られていなくて、幻の日本展といううわさが立って、ウィキペディアで調べようとしたら出ていないので「あれ？」というふうにびっくりしましたが、素晴らしい展覧会ができたと思っています。

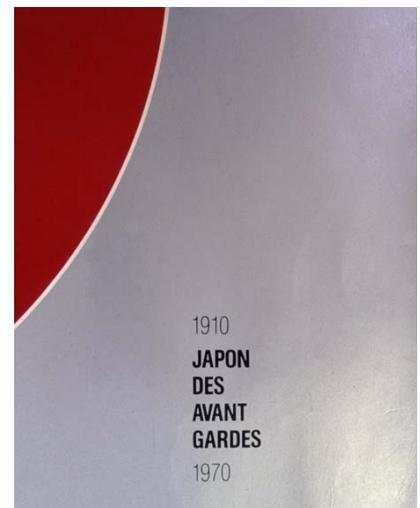
展覧会がどういうふうに行われるかを私も関係した「前衛芸術の日本」展を例にご説明をしたいと思います。まず、広場側のファサードに2フロア分の大きな幕がどの展覧会でも掲げられます。これはレ・アールの鉄道駅から来るところの真正面に見えるようにできているんですね。これは6階の展覧会入口です。具体美術協会という関西のグループのメンバーだった白髪一雄さんの「超現代三番



「地球の地図と形象展」展（1980）
© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI,
Centre Pompidou



「ウィーン」展（1986）
© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI,
Centre Pompidou



「前衛芸術の日本」展（1986-1987）
提供：NOAN



「前衛芸術の日本」展（1986-1987）
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

隻」をこのために再現してもらい展示しました。入口のデザインをするときにこの展覧会を象徴する作品としました。日本語で「前衛芸術の日本」。伝統的なアートの力が非常に強い日本において、新たなことをやろうとした人はどれだけ苦労したかということフランス側が非常に買って、前衛という字をタイトルに入れることにしました。

奈良原一高さんの素晴らしい写真、長崎にある軍艦島ですね。当時はもう廃虚になっていました。これを東京電機大学の阿久井先生がずっと研究されていて、調査もされました。世界でも一番最初のころの鉄筋コンクリートで造られた集合住宅。炭鉱を掘るための島ですけれども軍艦島。軍艦と間違われて砲撃されるんじゃないかという確かにそんな感じがあります。

「聴竹居」、京都の大山崎にある藤井厚二という建築家がデザインした住宅です。今はきれいに直されて見学もできる建物なのですが、当時はだいぶ廃虚化していました。それを三宅理一さんが「絶対これを入れる」と言って入れました。アールデコ調の内装と同時に日本の住居環境にぴったりになるような設計をされた非常に素晴らしい建築です。これを再現するのに当たっては、前衛的宮大工と言える田中文夫さんに棟梁として来ていただきました。「大文（だいふみ）さん」と呼んでいますけれども、彼に全部造ってもらってポンピドゥー・センターの中で組み立ててもらいました。

日本の材料を使いますから、非常に乾燥させてしっかり造ってこないと展覧会を3カ月間やっている間にゆがんじゃったりしてしまうわけですね。それを非常に気にされて素材を選んで造り上げていったわけです。唯一の問題は、大工さんに来てもらったけれども張り紙をやったりする経師屋さんを連れていくわけにいなかったもので、ポンピドゥー・センターの中にはこういう造作をする人たちがたくさんいるので、たくさんとかプロがいますから彼らにやってもらおうと思って、例えば辰野金吾さんの作品はヨーロッパからの影響で造られている日本の建築ですから、彼らは図面を見た途端に「こんなのすぐできる」とあっという間に造っちゃいました。逆に日本建築は造れないので、襖紙や障子紙を張るのに経師屋さんがないからやってもらったら、田中の大文さんは非常に怒って、「フランス人の経師屋は分かっとらん、べたべた塗りやがって」と散々怒っていましたが、そのうち仲良くなっていきました。

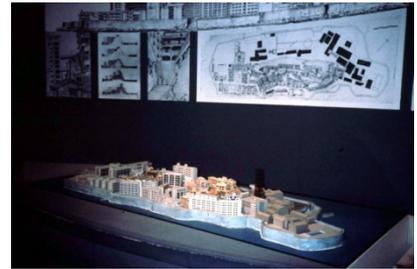
ポンピドゥー・センターの地下にアトリエがありまして、そこで大工仕事やら映像関係の仕事をするんですけども、そこに卓球台があって、日本から来た方たちとポンピドゥー・センターの大工さんや展示ケースを造る人たちが一緒になって卓球をやっていたという、非常にそういうほほえましいことも起きました。

これは河原温の作品ですね。ポントゥス・フルテンは非常に河原温が好きでして「河原温を出すんだ」と。河原さんの初期の作品です。

これは戦後のコーナーに入ります。広島原爆記念館から借りた、溶けてしまった瓶とかそういう物を展示しました。こちらが丹



入口展示、白髪一雄「超現代三番叟」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示、「軍艦島」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示、藤井厚二「聴竹居」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示、河原温「天然痘」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示右、丹下健三「広島平和記念公園」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

下健三さん設計の広島平和記念公園の模型です。

あと、これは丹下さんが発表した「東京計画 1960」、素晴らしいプロジェクトだったので外国人のほとんどの建築家が知っています。「東京計画 1960」の巨大な模型を持ってくるのは大変だったんですけれども、これを展示しました。後ろのほうに見えるのは、まだ記憶されている方もいらっしゃると思いますけれども、スバル360です。この展覧会は1910~1970年で区切ったんです。1970年以前にあった素晴らしい物を選ぶということで選んだんです。

あとはアート関係です。「もの派」と言われる人たちの作品で、世界ではまだ知られていなかった時代です。これは李禹煥さんの作品です。あとは三木富雄さんの「耳」の彫刻です。これは本当に素晴らしい、田中敦子さんの作品の「電気服」です。日本の電気の周波数は50ヘルツ、60ヘルツと東と西で分かれている奇妙な国なんですけれども、この時も周波数を合わせるのに大変で、ポンピドゥー・センターの中に電気班、電気屋さんがいるんですけれども、彼らは「これは大変だ」とだいぶ苦労していました。この作品も再現してもらって造った模型でポンピドゥー・センターのコレクションになっています。

あと建築は、東京工業大学の清家清さんの作品「斉藤助教授の家」です。これを素直に見せてもというので、申し訳ないですが、斜めに切らせていただいて断面が見えるようにしました。これも大工の大文さんが造ってくれました。そして、篠原一男さん設計の住宅。篠原一男さんは大変に美しく清楚な建築を造られるのでフランスで非常に人気のある建築家で、お弟子さんも結構います。この時は、写真は逆に大きく、模型は小さくという形で展示しました。

それ以外にいろいろなインダストリアルデザインの展示です。1970年以後にももっと盛んになるんですが、その当時の物をピックアップして造りました。これはフジカシングル-8という小さな8ミリムービーですが、これは逆に富士フィルムなのでレントゲン写真を撮って大きくしてもらおうという展示をしました。こちらはダックスホンダ。ダックスホンダはパリの街をいくらでも走っていたんですが、実車が借りられなかったので、実物大の写真を展示しました。



展示. 清家清「斉藤助教授の家」
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



展示. 丹下健三「東京計画 1960」
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



「もの派」の展示
© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI,
Centre Pompidou



「もの派」の展示
© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI,
Centre Pompidou



展示. 田中敦子「電気服」
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



展示. 篠原一男の住宅
© Noriaki OKABE 提供: NOAN

これは非常に天才的なデザイナーだった倉俣史朗さんの「変形の家具」です。この展覧会のデザイン部門はレイモン・ギドーというキュレーターがやっていたんですけども、彼は倉俣さんの作品が大好きでした。奥には東孝光さんの「塔の家」。本当にミニマルな家です。今も存在していると思います。小さい住宅だから 5 分の 1 ぐらいの大きい模型にしようというふうにして造ったものです。

この時代はまだファッションで森英恵さんしか出ていなかった。1970 年で区切ったので。この後に三宅一生さんをはじめ多くのデザイナーがどんどん出てくるんですけども。最後を飾ったのは森英恵さんの作品となりました。

もう 1 つ、展覧会をご説明します。これは、私がコミッショナーとして作品の選択に関わった展覧会です。ポンピドゥー・センターは 1997 年以降に大改造で 2 年間閉めます。ヨーロッパは 2000 年をベースにいろんなことが動きましたから、2000 年になる前にポンピドゥー・センターは大修理に入るんです。その閉じる前の最後に「エンジニアのアート」展という名前の展覧会をやりました。これも入り口のフォーラム部分の地下と横の中 2 階部分を使った非常に大きな展覧会でした。

先ほど紹介したポンピドゥー・センターの構造デザインをやってくれたピーター・ライスが関西空港をやっている最中に亡くなったんですけども、亡くなる 1 年前から脳腫瘍が分かったので「自分はもう死ぬかもしれないから本を書く」と言って書かれた本が『あるエンジニアの夢みたこと』です。その本の日本語翻訳の監修を私がやったんですけどもフランス語のも出て。エンジニアが淡々と自分の考えたことを書いた物って非常に少ないんですね。伝記的に書く人は多いんですけども。ピーターの本は、鹿島出版会から出版されて今 5 刷、5 版ぐらいになっています。多くの人たちに読まれているんですが、その本がフランスで出た時に、先ほどご紹介したジェルマン・ヴィアットから「やっぱりピーターのことで何かやりたいね」という話が出ました。エンジニアリングが現代社会をつくってきた重要度はあるけれども、エンジニアリングをアートの観点からも見た展覧会をやるんじゃないかという気運が盛り上がって出来たのが、この「エンジニアのアート」展です。

世界中からいろいろなエンジニアリングを 200 年にわたって、鉄が工業化して使われるようになった時代からコンクリートが使われ、ちょっと後になります鉄筋コンクリートができた時代なんかを歴史のスタートラインにして組み立ててつくろうという、膨大な展覧会でした。

これは鉄のセクションです。今もまだ存在していますけれどもフォース橋です。このセクションにはエッフェルが造ったガラビの橋梁やさまざまな建物、水晶宮に至るまで、鉄を使い始めた時代の展示がありました。これは圧巻でした。最初に造った鉄の柱をイギリスから持ってきて展示されました。

次は鉄筋コンクリートのセクションです。鉄筋コンクリートにつ



インダストリアルデザインの展示。
ダックスホンダとフジカシングル-8
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示前、倉俣史朗「変形の家具」
展示奥、東孝光「塔の家」
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



「エンジニアのアート」展 (1997)
© Bibliothèque Kandinsky, MNAM/CCI,
Centre Pompidou



展示、鉄のセクション
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



展示、鉄筋コンクリートのセクション
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

いて、パイオニアといわれるのはスイスのマイヤールという人です。彼はスイスの中に橋を造りました。鉄筋コンクリートといっても、最初はどうやって鉄筋コンクリートを造り上げるかという試行錯誤がいっぱいあったんです。それを見事にまとめあげて造っていたのがマイヤールです。スイスにはマイヤール研究所というのがあります。現在でもおそらくマイヤールのデザインした 44 本ぐらいの橋がスイスの山の中にはあります。

これはフェリクス・キャンデラが、非常に薄膜のシェル構造で造ったメキシコのソチミルコのレストランです。キャンデラはこの展覧会にご招待していたんですけども、数日前に亡くなりました。

第 3 セクションは、大空間構造といって大きな空間を覆うための構造体は何だろうかというテーマです。これはアメリカの発明家であり建築家、数学者でもあるバックミンスター・フラワーが造ったフラードームです。実物です。これはアメリカから運んできました。フラワーは、ダイマクション・カーという自動車も造っているんですが、さすがにこれは最後にお金がなくなって持ってこれなくて残念でした。

大きな空間構造を覆う物として蜘蛛の巣のようにあるのはドイツのフライ・オットーがザイルネットというシステムで造った構造体の 5 分の 1 の模型。こちらはシュライヒの空気膜構造のレンズです。ここにはいろいろな構造的な発明が入った物が置かれました。

次に近代美術館の常設展示についてお話します。ポンピドゥー・センターの持っている作品は膨大にあります。そのうちの何パーセントかを常設展示として時々替えながら出していくわけです。

オルセー美術館の改修を手掛けたガエ・アウレンティというイタリア人のデザイナー、建築家が同時期にポンピドゥー・センターの改造を担当しました。私たちのオフィスは一応コメントをするということで、一番重要にしてくださいとお願いしたことは南北方向の抜け、建物が 160 メートルありますけれども、その方向の先は開けてくださいということでした。ガエはそれを守ってくれて、ポーンと一番突き当たりにノートルダム寺院が見える。都市を常に意識しながらアートを見るという環境を造っていったわけです。

これも常設展示です。非常に重要なミロの作品で『ブルー』という、青という絵画なんですけれども、この作品はバラバラにコレクションされていたところをコレクターを説得して、全部集めて、今はポンピドゥー・センターにこの 3 点が並んでいます。素晴らしい作品です。

5 階テラスより見た風景ですけれども、パリを望む、パリを知る。この美術館の上に立ったら都市が見えるという考え方はポンピドゥー・センターで打ち出したわけなんですけれども、非常に重要なことです。都市と共にあって、そこでもう一回自分たちの世界を見ていくということを感じることができるんです。ポンピドゥー・センターの 20 年後に出来るロンドンのテート・モダンという美術館で



展示. 鉄筋コンクリートのセクション
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



展示. 大空間のセクション
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



常設展示. 南北方向の抜け
提供: RPBW



常設展示. ノートルダム寺院が見える
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



常設展示. ジョアン・ミロ「青」
© Noriaki OKABE 提供: NOAN

も一番上の階をレストランにしてロンドンの都市を見るというもの
を造っています。これはポンピドゥー・センターの完全な影響が
出ています。それから日本でいえば、森美術館が超高層の一番上
に美術館を置いています。森さんは、ちょうど私がポンピドゥー・
センターをやっていた頃に見学に来られています。やはりそれを考
えていられたのかなど。実際に森美術館を造る時のアドバイザー
の中にはポンピドゥー・センターの美術館の館長たちが入って
います。

そういう意味で、美術館は閉じられたものではなくて、開かれ
ていくと同時に都市を見いだすという世界です。われわれにと
って一番ありがたかったことは、やはりポンピドゥー・センター
からエッフェル塔が見えたことです。エッフェル塔というのは
1889 年に出来上がるんですけども、1900 年ごろに解体する
ということを散々言われますが、エッフェルはいろんな条件を
付けながらエッフェル塔を維持します。今、エッフェル塔の
ないパリは想像できない。我々も建設していた頃は散々な
ことを言われたんです。その時に、エッフェル塔のことを
考えたら「エッフェル塔はちゃんと残ったじゃないか」と
いう、一番力を与えてくれたのが遠くに見えるエッフェル
塔です。

私は 1986 年に「前衛芸術の日本」展の展示設計を担当
しましたが、完成から 40 年もたつと展示の仕方はみんな
だんだん上手になってくるの感じます。建物について
いろんなことを理解してくれている。6 階の企画展の
部分では、やはり都市が見える構図を造ってやってく
れます。これはゲルハルト・リヒターの展覧会です
けれども、北側は開けることができます。北側とい
うのは光が安定していますから強い光が入ってこ
ないんですね。アート作品は自然光によるダメージ
に対して結構シビアに見なきゃいけないもの
が多いですから、そういう中で北側を開けてふ
つと都市と出会うという空間を造るようになって
います。

次に図書館ですけれども、年に 1 万人以上の人
が利用するというのがポンピドゥー・センターの
図書館です。35~36 万冊の本があるんです
けれども、ここは何が重要かという、フランス
人はもともと図書館で勉強する、あるいは
図書館を使う習慣が伝統的にあります
けれども、この図書館は開架式です。とい
うのは、欲しい本を自分で持ってきて読
めるんです。読み終わったら置いてい
けばいいんです。たくさんの図書館司書
の方たちがいて、本を見付けるのを
指導に当たってくれます。

ポンピドゥー大統領が考えた発想のもとに、
図書館にはみんな来るだろうと。来た時に
そばに美術館があったら観るんじゃない
かと。そういう構造も造っていこうとい
う提案が根本的に最初にあったわけ
です。それが今も動いています。図書
館は非常に重要な役割を果たして
います。

現代は情報化社会ですからどんどんいい
機材が入ってきて、コンピューター
を使った物もたくさんあります。もち
ろんインターネットでのアクセスも
行われています。



5 階テラス
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



企画展示、「ゲルハルト・リヒター」展
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



企画展示、パリの街並みが見える
提供：RBPW



公共情報図書館
提供：RBPW



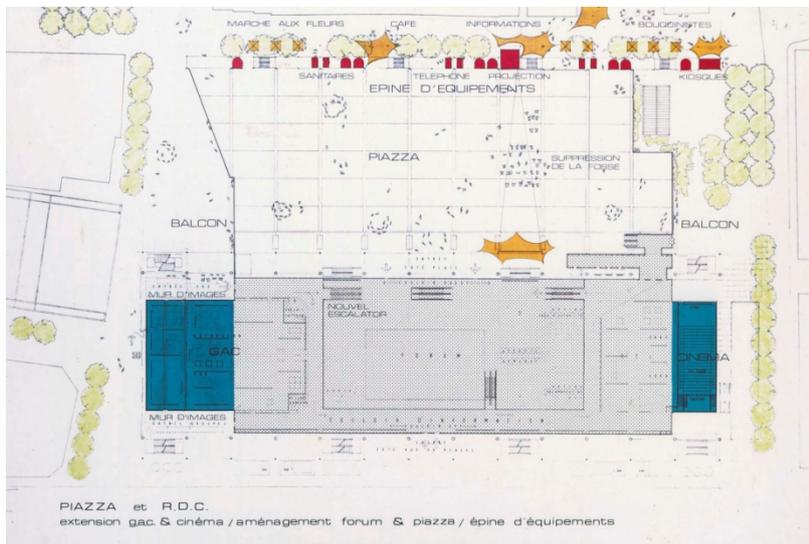
公共情報図書館
提供：RBPW

「子供のアトリエ」を説明しますと、子供のアトリエは出来た頃からさまざまなことをやって世界中にいろんな影響を与えたんです。非常にクリエイティブな子どもたちの学習の方法をアートの展覧会と一緒にやりました。近年、子供のアトリエはさらに大きな発展をして、3 つぐらいのアクティビティが子供のアトリエを残しながら展開しています。2000 年以降の改装の時に「子供のギャラリー」という子供たちが楽しめる場所をちょうどフォーラムに張り出した中 2 階に、みんなも見えるように造ろうということで今、出来ています。

5. ポンピドゥー・センターの展開

—そして未来、壁の外へ

ポンピドゥー・センターは 2019 年から大規模な改修工事入っているのですが、その前に、私がまだパリにいた時代にやっていた仕事で、1983 年にポンピドゥー・センターを拡張するという仕事をやりました。これはあまり伝えられていません。われわれも別にパブリシティをする必要はないので言ってないんですが、広場の下がった部分（フォーラムの階）を 1 階とすると、2 階部分です。ポンピドゥー・センターの中 2 階部分だった北側と南側に増築したんです。密やかに増築しました。視覚的には誰も気が付かないです。なぜ気が付かないかというと、増築部の両サイドに非常階段がありますから、その間を縫ってスッと造ったので誰も気が付かない。面積としてはかなり大きい増築です。



平面図、南側の現代ギャラリー（左）と北側の映画館（右）が増築された
提供：RPBW

最初の映画館、シネマテックは上の階、6 階にありました。ただ、上に映画館があるのは非常に不便で、映画館は遅くまでやっているのに 12 時になってから帰るとなるとその時間まで出口までの

ルートを全部開けておかないといけない。そういうこともあって、3代目の館長だったマオさんは、ものすごく映画好きで黒澤明の大ファンだった人ですけれども、彼が映画館を造りたいと言って、北側にサル・ガランスという映画館を造りました。

南側の増築部は現代アーティストのための現代ギャラリーです。地上階にあるのは非常に良く、重たい物を乗せられるんです。ポンピドゥー・センターは重たい物を乗せられるように造ってあるけれども、例えばリチャード・セラの作品みたいな鉄の塊を上階に持っていくのはエレベーターも大変です。地上階にあると重たい物も置けるということで、ここは大型作品の展示をすることが可能なエリアになるわけです。

ただ、この許可を取るのが非常に大変でした。ポンピドゥー・センターができたときに「こんなもん造って」と散々言われたんですけども、いざこれで改造申請をする時にサイトコミティー、景観委員会などに許可をもらわなきゃいけないんです。この地区の建築家や、歴史的な建造物の検査建築家に許可をもらわなきゃいけなくて、最後は市民も入ったところでイエス、ノーが出るんですね。図面を持っていったら、「駄目だよ、そんなのやっちゃ」「こっちはこうしよう」と散々いろんなことを言われました。「ポンピドゥー・センターはもうそろそろナショナルモニュメントになるんだから、こんな勝手にいじっちゃ駄目だよ」というふうに。それはもう笑い出すような話です。これを造っていた頃のことを考えれば。

ここで多くの展覧会が行われてきました。これは建築の展覧会の1つです。2008年、ドミニク・ペローの展覧会をやっています。外に見えるのは IRCAM の上にあるストラヴィンスキー広場です。これは安藤忠雄さんの展覧会で2019年の暮れです。

フォーラムは先ほど申し上げたように、穴をだいぶ埋めて使えるスペースを増やしています。こういうことになるまでに10年ぐらい、いろんな計画を立てたんです。穴はやっぱり埋めないほうがいいんじゃないかとかいうことで、早く埋めてくれればいいのと思いつつもなかなか出来なかった。でもこれをやった途端に面積があつという間に増えるわけです。そういうフレキシビリティがこの建物が持っている特徴です。



現在のフォーラム
提供：RBPW



増築後の現代ギャラリー。
「ドミニク・ペロー」展 (2008)
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

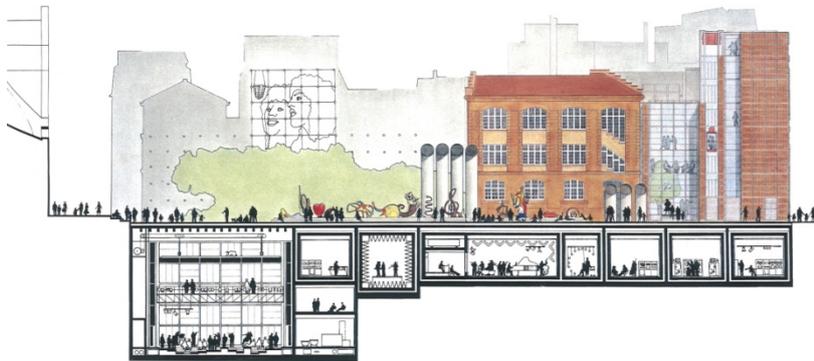


増築後の現代ギャラリー。
「安藤忠雄」展 (2018)
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



現在のフォーラム
提供：RBPW

これは私がフランスにいた最後にやった仕事の 1 つです。先ほどお話しした半分の面積にされてしまった IRCAM 音響音楽研究所。ブーレーズはどんどん活動を広めて、周りの建物をいろんな物を移したり増やしながら、周りの建物をだいたい改修してそれらの中にいろんな施設を移しました。図書館の施設とか音楽研究所の学校とかいろいろ造ったんですが、やっぱり足りない。じゃあということで、ジャック・ラング文化相の時だったんですが、1 つ建物を拡張しようというので本当に小さな面積なんですけれども、1990 年にポンピドゥー・センターの横にタワーを造りました。IRCAM の地下の音響的に遮断された空間は非常にリッチですから、その中にあった事務的なものだけを全部地上に吐き出して IRCAM のタワーに移し、地下部分は研究者たちのスペースとして改造したんです。



IRCAM 音響音楽研究所 断面図。
提供：RBPW

IRCAM タワーは今、レンゾ・ピアノの名前を取ってピアノタワーという名前になっています。地下にある IRCAM の上の広場にニキ・ド・サンファルとジャン・ティンゲリーという 2 人のアーティストによって造られた噴水があります。この広場はストラヴィンスキー広場といって作曲家の名前を付けているんですけれども大変人気があります。

これには思い出がありまして、建物が出来た時にこの広場は何もなかったんです。ブーレーズに会った時に、「君らは一生懸命いい建物を造ってくれたけど、1 つだけ不満がある」「あの広場は何だ」と、「あんなに悲しいじゃないか」ということを言われたんですね。その後にこの噴水はニキ・ド・サンファルとジャン・ティンゲリー、そしてパリ市の協力もあって出来たんですけれども、ものすごく楽しい。2 人はすごく素晴らしいコンビなんです。だからポンピドゥー・センターの周りには 2 つの広場がある。1 つはポンピドゥー・センターのメインのピアッツァ、もう 1 つはストラヴィンスキー広場です。楽しい場所ですね。

さらに大きな改造をやったのは、2000 年を前にして建てられたブランクーシのアトリエ。コンスタンティン・ブランクーシというのは現代彫刻の祖といわれる人です。ルーマニア人ですけれども、お子さん、ファミリーがなかったので亡くなる前に、全ての自分の



IRCAM 音響音楽研究所増築棟 (1990)
提供：RBPW



ストラヴィンスキー広場より IRCAM タワーとポンピドゥー・センターを見る
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



ストラヴィンスキー広場
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



ブランクーシのアトリエ (1997)
提供：RBPW

持っている物はフランス国家に寄付しますという遺言を残したんですが、それには条件があって、アトリエをそのまま造れという条件です。

私も最初の頃のチームに入った時に「1つ解決していない問題があるので、これをちょっとやってみてくれる？」と言われていたのがそのブランクーシのアトリエをどこかに造れということでした。ポンピドゥー・センターの中にまず入れろと言われて、全部測ったんだけども入らないんですね。入らないよと言って、じゃあ駄目だ、どうしようといって広場の所に計画しました。そのとおりに設計したんだけども予算上、割とバラック的な感じでしかできなかったの、計画が延々と残っていたんですね。あと、管理上、防犯上もあまり良くないだろうと。いろんなことが要因にあって、じゃあ思い切ってここではお金を掛けてきちっとしたものを造ることになりました。ブランクーシは非常に重要な作家なので、これは造ろうということで1997年にブランクーシのアトリエをしっかりと造りました。

これは600平方メートルぐらいあるんですけども、今も素晴らしい場所になっています。内部はアトリエをそのとおりに再現してありますから、彼が使ったのみとか、いろいろな制作していた道具類も全部置いてあります。今は防犯上、ガラス張りですが。

今、何が起きているかという、これが2019年のポンピドゥー・センターです。大工事のため広場は入れないようになって、エスカレーターはもう使えない。今新たに大型のエレベーターを3基用意してそれを使って、動線を処理しています。図書館のほうは中にもエスカレーターがありますからそれを使って運営しています。ただ、エレベーターとエスカレーターは搬送量が全然違うのでこれはどうするのかなという感じですが、今は広場の反対側のほうから入るんですけども、予約制というか、なるべくネットで予約をしてくださいねというアナウンスは出ています。大きな工事が今年、来年にかけて始まっています。

工事は活動を閉じないでやります。実は2000年の工事の時に1997年以降に2年間閉じた時に、この周りが本当に死んだようになっちゃったんです。人がいない。それはものすごく寂しい思いをみんなしたので、今度の計画では常に使いながら工事をするということになっています。

ポンピドゥー・センターは活動の拡大でいろんなことを始めています。1つがドイツの国境に近いほうに造られたポンピドゥー・センター・メスという別館です。これはオープンコンペではなくて指名コンペでした。日本の坂茂さんのグループが優勝し実現しました。今、非常に多くの活動をしています。

それから、あともう1つはポンピドゥー・センター・マラガです。2015年、スペインのマラガにも別館ができました。ポンピドゥー・センターで40年間蓄積してきたさまざまなノウハウとものすごくたくさんさんのコレクションを持っていますからそれを貸し出すこ



ポンピドゥー・センター広場と奥に
ブランクーシのアトリエ

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



ブランクーシのアトリエの内部

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



改修工事中のポンピドゥーセンター
(2019年撮影)

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



エスカレーターの工事中の動線となるエ
レベーターのタワー

© Noriaki OKABE 提供：NOAN



ポンピドゥー・センター・メス (2010)

© Noriaki OKABE 提供：NOAN

とによって世界中の中に美術を開いていくということですね。

そしてつい最近、オープンは2019年11月8日でしたか。イギリス人の建築家、デイヴィッド・チップパーフィールドがデザインしていますけれども、上海です。上海にポンピドゥー・センター別館が5年契約でそれを更新するというタイプのものだと思いますが、オープニングの日にフランスから現大統領のエマニュエル・マクロンが来て長いスピーチをしていました。

ふと気が付いたんですけども、エマニュエル・マクロン大統領って非常に若いじゃないですか。いつ生まれたんだろうなと思ったら1977年に生まれているんですよ。1977年といえば、先ほど申し上げたポンピドゥー・センターがオープンしたのが1月31日、1977年なんです。マクロンは12月21日、1977年です。だから、ポンピドゥー・センターが生まれた時に生まれたのが今の大統領だと思ったら「ええっ」という感じでびっくりして。そういう年月をポンピドゥー・センターが過ごしたんだなということと、そうした文化政策が世界中にきちっとしたあるリンクを貼っていく、一つの大きな要素になっているんだなということを考えるところです。

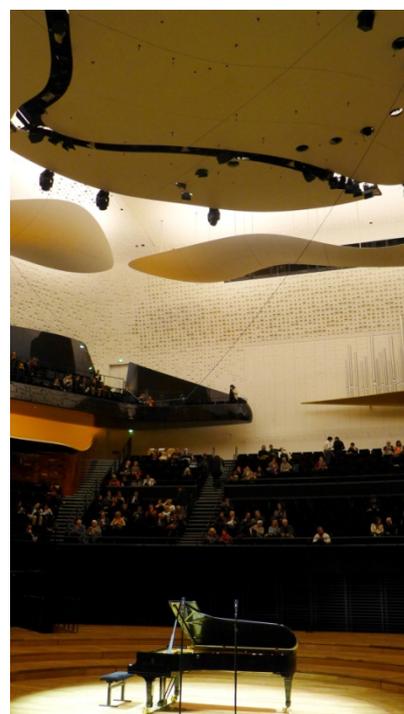
もう1つ、来年オープンするのはベルギー。パリの近くだんですけども、ベルギーにカナル・ポンピドゥー・センターが出来ます。この場所はシトロエンという自動車会社の工場があったところで、工場を改修して美術館にする計画です。一部では活動をすでに始めていますけれども正式には来年オープンする。6,000平方メートルぐらいの大きなスペースを使った美術館となります。

これはポンピドゥー・センターと直接関係ないのですが、ピエール・ブーレーズが IRCAM 音響音楽研究所の所長を務め、その後尽力したプロジェクトをご紹介します。近年、フランスでは音響音楽に関することがいろいろ行われて、ブーレーズがものすごく頑張っていたんですが、ドイツなんかと比べると音楽を聴く場所、コンサートホールが決してリッチだとはいえなかったんです。パリは長いこと、世界の文化都市として存在していますけれども、音楽だけはどうしてもその施設が足りない。みんなが望んでいたのですが、なかなか長期計画で出来なくて、パリ北東部にラ・ヴィレットという科学博物館がありますけれども、そのそばに音楽都市というのを造りました。それはすでに出来ていたんですが、本当のシンフォニーホールの大きな物が出来なかったんです。

それがやっと実現したのが、2015年に実現したフィルハーモニー・ド・パリ、パリ交響楽団の建物です。これはジャン・ヌーヴェルというフランスのトップの建築家がデザインしたんですけども、実はこういう物を造りたいというのはブーレーズの非常に強い意志があったのです。で、IRCAMで蓄積した考えがかなりこの中に入っています。すごく変わった建物ですけども、これはジャン・ヌーヴェルらしい思い込みの建物です。このコンサートホールは、ベルリンフィルと同じようにブドウ棚タイプで素晴らしく臨場感がある。音響もとても優れています。このホールの名前は「サ



フィルハーモニー・ド・パリ (2015)
© Noriaki OKABE 提供: NOAN



ブーレーズのホール
© Noriaki OKABE 提供: NOAN

ル・ピエール・ブーレーズ」、ブレーズのホールと呼ばれています。

ここでやっている活動はポンピドゥー・センターで「子供のアトリエ」があったように、ファミリーのための音楽教室とか、さまざまな施設があって、家族でいろんな音楽を勉強したり、聴きにいたり、そういう場所がたくさん施設の中に入っています。2019年の世界文化賞で若手芸術家奨励制度に先行されたのは、子どもたち、特に貧しい低所得層の子どもたちに音楽を親しんでもらうために、フィルハーモニー・ド・パリが運営する音楽教育プログラムでした。楽器を子どもたちに貸し出して、それで音楽を勉強してもらうプロジェクトをずっと行っています。そういう活動をやりながら生きていく。これはブーレーズが考えた音楽の思想が生きているということです。ちなみにブーレーズの次に IRCAM の所長をやったローラン・ベイル (Laurent Bayle) が今ここの館長になっています。

ブーレーズに IRCAM の展覧会を企画してくれと言われて、しばらく直にブーレーズといろいろお話しをする機会がありましたけれども、ものすごくセンシティブだけれどもはっきりと物を言う方でした。

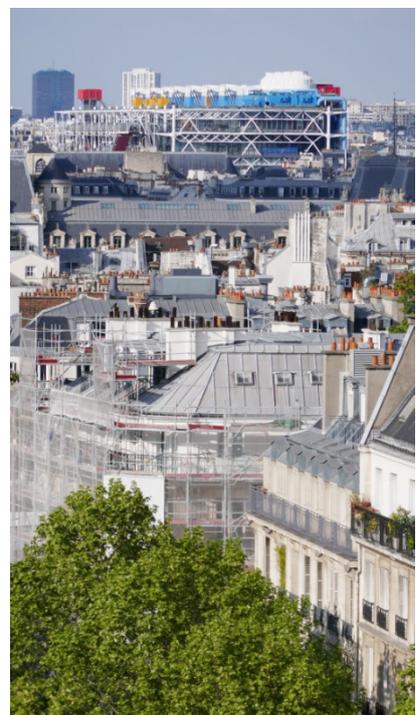
6. エピローグ

ーポンピドゥー・センターの伝えるもの

これまでの話で大体お分かりになったと思いますけれども、強烈な建物です。これが建築的にどういう価値があるかということよりも、多分一つの場所性、場-舞台を造ってしまったということです。あらゆる自由なことが行われるような場を都市の中に構築したということが大きいと思います。

プロジェクトが始まって進んでいた時、ポンピドゥー大統領は1974年に亡くなっています。先ほど申し上げたように亡くなった後につぶされそうになりました。その時、夏休みに入り始めていたのでチームの多くはバケーションに出ています、僕らは残っていて、その時に閣議でポンピドゥー・センターの建設を続けるかどうかの閣議が行われたのでそのためのドキュメントを作りました。もうここまで造ってこれだけのいい建物になっていますと説明するものを必死で作ったんですね。その結果ではないんですけども、やはりシラク首相が頑張ってくれたと思うんですが、ここでポンピドゥー・センターの建設が継続するという決定がなされたのです。同時にその時にレ・アール中央駅と横にあったショッピングセンターのプロジェクトはストップしました。その後、レ・アールは何回もいろんな苦勞をするんですけども、ポンピドゥー・センターはその時に造られたんですね。

ポンピドゥー大統領が亡くなる前の1973年に『ル・モンド』紙のインタビューの中で、今回造ろうとしている建物について、美術



ポンピドゥー・センター外観
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

館と図書館に来る人たちがさまざまなコミュニケーションを行って、かつ演劇をやったりコンサートをやったり、いろいろな活動が入っている。それが非常に役に立って効果を出すだろうと。その次に、それは結構お金が掛かるんだよ、大変なんだよということを言った後に、でも長い歴史を見れば国家予算からいったらほんの水滴1滴分だと。それだけの意味があるんだということを語っています。その1滴が大きな効果を現してきて、世界中に広まっているんだということです。

ポンピドゥー・センターはパリの都市において見る・見られるの関係にあります。最上階は、もう眺めがいいのでパリが全部見えます。この位置関係が重要だと申し上げたのは、ポンピドゥー・センターはパリの中心にあるということです。

やはり中心部にあるもう一つのモニュメントは13世紀の建物であるノートルダム寺院です。この写真は火災の前ですけれども、この尖塔は19世紀にヴィオレ・ル・デュクが造ったものです。非常に惨めな形になりましたけれども、今必死で調査、研究が行われて補強がされています。近い将来、10年後ぐらいにはきっと形が戻ってくるんじゃないかなと思います。1977年に出来たポンピドゥー・センターと13世紀のノートルダム寺院がパリの中心に見える風景があって、コントラストをなす2つの建物が一つのシンボルになって都市を表現しているものになっているのかなというふうに思います。



ポンピドゥー・センターとパリ
© Noriaki OKABE 提供：NOAN



ポンピドゥー・センターとパリ
提供：RPBW



ポンピドゥー・センターとノートルダム寺院
© Noriaki OKABE 提供：NOAN

そして、ターミナルという考え方です。ポンピドゥー・センターは文化のターミナルとして、中心になってノード（結節点）として発生する。1日2万人もの人たちが来て、それで自分の家に帰っていくという都市のネットワークが出来上がっていき、周辺部分が造られていく。こうした具体的な都市との関係性におけるネットワークと同時に、世界につながっていく情報で出来ていくネットワークの世界もあるということも、テーマである「モビリティとコミュニティ」を考えていくときの一つの要素となります。文化的な要素とネットワークのシステムの要素、ターミナルとしての価値というよ

うなことを考えていく一つのきっかけかと思います。

ポンピドゥー・センターが出来上がった頃に、友人で CCI（産業創造センター）の重要な役割を果たした女性のキュレーターの方が、やっぱり何ていったってポンピドゥー大統領がこれを造ろうと言ったのはフランスにとっては奇跡だとおっしゃっていました。フランスは非常に保守的な部分を持っていたので奇跡だと。同時にそれは国際コンペになった。国際コンペになって、その上でピアノ&ロジャース、フランキーニの案が選ばれた。これは 2 つ目の奇跡だと。そして、最大の奇跡は建設されたこと。その後に彼女は、ここから先は奇跡はなくて、非常に重たいフランスのアドミニストレーションが入ってくるのよね、と悲観的だったんですけども、実際には 40 年間これが使い続けられて発達してきたということは悲観を超える結果になったと思います。

※掲載写真の無断使用はご遠慮下さい。

【シンポジウム概要】

タイトル

シンポジウム モビリティとコミュニティの未来を考える

第 1 回 都市文化施設の革新 —ポンピドゥー・センターの軌跡

日時

2019 年 12 月 11 日（水）14:00-16:30

スケジュール

14:00-14:20 冒頭のご挨拶

14:20-16:00 都市文化施設の革新 —ポンピドゥー・センターの軌跡
建築家／岡部憲明アーキテクチャーネットワーク代表
岡部 憲明

16:00-16:30 第 2 回以降のご案内と閉会のご挨拶

場所

慶應義塾大学 日吉キャンパス 協生館 3 階 C3S10 教室

モデレーター

慶應義塾大学 教授 西村秀和

主催

慶應義塾大学 SDM 研究所モビリティシステムマネジメントセンター

後援

株式会社駐車場総合研究所